

とある青年兵士と
魔族の少女の物語

とある青年兵士と
魔族の少女の物語

とある青年兵士と
魔族の少女の物語

夕凧の大陸物語

writer : HIRO

「あの、大丈夫ですか？」

目覚めると、一人の女の子が自分の顔を覗き込んでいる事にその青年は気付いた。慌てて飛び起きようとするも、体中に痛みが走り思うように動けない。

「ああ動いてはいけませんよ、あなたは怪我をしているのですから」

そういうとその女の子は何やら聞きなれない言葉を発し始めた。それと同時に体の痛みが和らいでいくのがわかる。意識もかなりはっきりしてきたようだ。そして自分が膝枕をされていることに気づき、青年は慌てふためいてしまった。

「動いてはいけないと言ってますのに・・・」

困った顔をしながら覗き込む彼女と目があってしまい、ドギマギしてしまう。しかし、その輝く瞳を見た瞬間、彼は全ての痛みが、全身から引いてしまうほどの恐怖に襲われた。彼が見たその瞳は赤く輝いており、それは彼女が魔族であるという証であった。

そして、自分が反魔族国家クルドの兵士であることを彼は鮮明に思い出したのである。

人間と魔族と呼ばれる者達の戦争が始まってから約1年。

国境周辺では相変わらず激しい戦闘が繰り広げられていた。近々停戦交渉が行われるという噂もあるが、この激しさを間近で見ている者には、とても信じられる話ではないだろう。今でも多くの一般市民が魔族との戦いに参加する為、志願兵として軍隊への所属を希望しているのだ。

そしてランディ・オムもこの戦争に自ら志願した兵の一人だった。しかし今となっては志願した事をかなり後悔していた。

国境付近で魔族と戦闘状態に入り部隊は壊滅、ランディ自身は無事逃げ切ることはできたものの、見知らぬ土地、恐らくは敵国へレスで完全に迷ってしまったのである。

「くそっ、なんでこんなことになったんだっ！」

どこに敵の兵がいるかもわからないのにランディは声を荒げていた。集中力も相当弱ってきているのだろう。日も沈み始め視界も遮られるようになってきている。

ほんの一瞬だった。

地面を踏むはずだった彼の右足は、当然そこにあるべきものを踏めずに宙を彷徨ったのである。ランディは、自分が崖際を歩いていることさえ気付かないほどに疲弊しきっていたのだ。

(これで、俺の人生は終わりか・・・こんなところで・・・くそおおおおお！)

落下していく全ての景色が、何故かゆっくりに感じられる。

(これが死ぬということか。。。)

そこからの事は、もうランディは何も覚えてはいなかった。

森の中はすっかり暗くなっており、焚き火の炎だけが二人の影を浮かび上がらせていた。

ランディは持てる力の全てを振り絞り立ち上がった。怪我の痛みがなかったわけではないが、そんなことも言ってもらえない。

(そうだ、俺はあの時崖から滑り落ちたんだ。しかし。。。)

あの崖の上から落ちて無事で居ることは、通常ならありえまい。ということは、ランディは誰かに命を助けられた、ということになる。

(この魔族が俺を助けたというのか?)

少女は、自分に向けられた突然の敵意の意思を感じ取り寂しそうな目でランディを見つめていた。

「お前が俺を助けたのか？」

「はい、あの崖の上から落ちたらしく、大怪我をされていたので・・・」

「なぜ助けた？」

ランディは警戒しながらも聞かずに居られない疑問をぶつけた。自分が人間であることは明らかである。俺を何かに利用しようと考えているのか？しかし、政府高官やその親族でもない俺を捕らえたからと言って利用価値を見出せるとは思えない。

「答えろ！」

考えれば考えるほど混乱してくる。

目の前の少女は、今も寂しそうな表情でランディを見つめた。

「あの、お怪我をされているようですし、あのままほおっておけばあなたのお命に関わるのだと思いましたので。。」

「そうじゃない！」

この魔族は俺をからかっているのか？ランディは怪我の痛みを忘れるほど苛立ちながらも一度質問した。

「俺は人間でお前は魔族だ！敵対してる種族の俺をなぜ助けるんだと聞いている！」

「私は。。」

少女は一旦言葉を切り、こう続けた。

「私は目の前に傷付いた人がいるなら、それを黙って見過ごすことなどできません。」

優しい声では有るが、しかしきっぱりと少女は答えた。

その魔族の答えは、極当たり前の事かもしれない。しかし、敵対している者を助ける理由など戦場では見当たらないではないか。

「お、目が覚めたか」

ランディが思い巡らせていた考えを破るように突然別の声が聞こえてきた。はっと我に返り警戒態勢をとろうとするも、怪我の痛みで思うような行動が取れない。

「そう警戒すんなよ。河で流されていたお前を岸まで運んだのは俺なんだぜ？感謝して欲しいくらいだよ。」

男はやれやれといった感じで両手を広げて見せた。

ランディはいきなり現れた男に警戒しながらも確認だけは怠らなかった。赤色に輝く瞳、この男も魔族だった。

「もう暗くなってきたし村へ戻りましょう。」

「そうだなりサーナ。」

そう言うと、男はランディに向かい何かを唱え始めた。その途端、ランディの体から全ての力が抜けてしまった。

「ぐっ、一体何を。。。」

「悪いな。しかし、お前さんを抱えて村へいくまでに暴れ回られるわけにはいかないのでね。」

ランディの物凄い形相を尻目に男はランディを担ぎあげ村と思われる方向へと歩き出した。

「まあ大きな怪我ではありますが、別に命に別状はありません。」

そう言いながらも村の医師は困惑の表情を隠そうとはしなかった。

いや、医師だけではない。この医師の家を取り囲むように集まった大勢のヘレス人達も同じ心境だったであろう。リサーナがクルド人を助けたという報は、瞬く間に村全体へと知れ渡ったのだ。

(一体俺は、どうなってしまうんだろう。。。)

怪我がたいした事もなく、少しは安心したのだろう。ランディはかなり落ち着きを取り戻していた。

そしてその分頭も冷静に働き出し、現在のこの状況に底知れぬ不安を感じ始めた。

敵国の兵士を助けるなどという話は聞いたことが無い。それに、出迎えにきた魔族と少女達のやりとりを聞いていると、ランディが歓迎されていない客人であることは容易に想像がついた。

「お、だいぶ顔色もよくなってきたな」

ランディが思考を巡らせていると、牢のドアの方向からいきなり声がした。

ランディーは今、村にある唯一の牢に入れられている。牢と言っても、普通の民家を改築しただけのものなので、普通の家屋とそれほど違いは無かった。唯一鍵だけは、外からかけられることくらいだろう。

(確か、レオンて呼ばれてた奴だ。)

声の主は、怪我したランディを村まで運んだ魔族の男だった。

「たいしたことなくて良かったじゃないか。これで死なれたりしたら後味が悪いからな」

そういいながらレオンは笑い始める。

「何故助けたんです？」

ランディはもうずっと頭の中で繰り返していた疑問をぶつけた。

「あなた方魔族にとって俺は、俺たち人間は敵なはずだ。何故その人間を助けるんだ？俺には全く理解できない」

「またそれかよ。さっきも言ったがリサーナが助けたいとிட்டからだよ。ただそれだけだ。」

「それじゃ答えになってませんよ！」

レオンはふ〜とため息を一度ついてから話始めた。

「君の国の人は、全てが戦争を歓迎してるのかい？」

「いえ、そういうわけではありませんが。。。」

ランディも、元々は戦争に興味はなかった。しかし、魔族に親しい友人を殺されてからは「反魔族」を掲げるようになったのだ。

「我々だって同じだ。全てのヘレス人・・・おっと、君等風に言えば「魔族」かな？、まあとにかく、ヘレス人も全員が全員、戦争したいわけじゃない。俺たちのように、戦争を嫌って避難してるやつらだってたくさんいるんだ。」

そしてこうも言った。

「俺たちは、別にクルドが嫌いなわけじゃない」

部屋の中にはリサーナの他に、恐らくは村の代表者たちだろう。6名ほどの男たちがぐるりと彼女を囲むように座っていた。

「リサーナ様」

村の村長らしき男がリサーナに話しかける。

「我々は戦争を避ける為にこの場所にきているのです。あのようなクルド人を助け、治療までされるとは。

一体何をお考えなのですか？」

「私はただ、怪我をしたあの方をそのままにしておくことができなかつただけです。」

そういうとりサーナはうつむいてしまった。

心の優しい少女だと言うことはここにいる皆が知っていることだった。でなければ、わざわざこんな辺境の森にまで彼女を守る為に皆が着いて来はしない。

しかし、今回のことは少々やっかいすぎる出来事だった。あの怪我をしているクルドの青年を今後どうするのか。

思ったより怪我也軽かったと先ほど連絡もはいった。リサーナは喜んでいたが、怪我が治った青年をそのまま帰すわけには行かない。

そのまま帰せば、この場所がクルドに漏れるおそれ大きい。こんな小さな村では襲う価値もないかもしれないが、リサーナの存在をクルド人共が知れば、戦争の道具としてクルド側に利用されてしまうだろう。

村長である彼は、決意した。

「まあ、やってしまったことは仕方ありません。しかし、彼をそのまま帰すわけにはいきませんか？」

「どういうことですか？」

リサーナは怪訝な表情を見せた。

「彼の記憶全てを消去します」

ランディが魔族の村へ運ばれてきてからすでに1週間が経過していた。
傷の具合もかなりよくなってきており、もう歩くことも簡単にできるようになった。

もっとも、ランディに自由が許されているのはこの部屋だけであり、24時間廊下と窓の外には見張りが立っていたのだが。

しかしこの1週間、窓のから村の風景を見ていたが人間のそれとなんら変わることはなかった。子供達は無邪気に走り回り、夕方には畑から戻ってくる魔族が帰路を急ぐ。

そして、その風景を見ながら先日のレオンとのやりとりをランディは思い返していた。

「俺たちは別にクルド人が嫌いなわけじゃない」

レオンの言葉に意外だがランディも同意はしていた。自分も以前は別に魔族の事なんか特に意識したことはなかったからだ。

「しかし今、俺とあなた方は敵同士なんだ」

そして、親しい友人を魔族に殺された。

ランディはもう何回口話したかかわからない言葉を口にした。しかし確かにそれが今の現実なのだ。魔族と人間、クルドとヘレス、この二つの相容れない種族と国家は間違いなく敵対している。

「じゃあ君は、リサーナも殺したいと思うのかい？」

レオンの言葉にランディは即答できなかった。あの少女、自分を助けてくれた少女を斬れるのか？

「まあ、普通は自分を助けてくれた奴を殺したりはできないよなあ」

レオンは誰に言うでもなく、ぽつりと言ったがランディはどう言葉を返していいかわからず、そのまま黙り込んでしまった。

「いや、悪かった。別に君を困らせようとしたわけじゃないんだ。」

レオンはそこで一度言葉を切り、こう続けた。

「リサーナは優しい子だ。君を助けたのもただ単に助けたいと思っただけだろう。」

それはランディーにも十分わかっていた。

彼女は、毎日のように、この簡素な牢に現れては、あれこれとランディーの世話を焼こうとするのだ。外の見張りが、いつもハラハラしていたのを思い出すと、少し吹き出しそうになる。

リサーナは、クルド人の生活にも興味があるらしく、あれこれとクルドの文化について尋ねてきた。

最初は、自国の事を探ろうとしているのかと警戒していたが、彼女がヘレスの文化についてラ

ンディーに熱く語っていた事を考えると、そんな考えも馬鹿馬鹿しく思え、最近では互いの文化についての交流と言えるほどまでに仲良くなっていた。

ここに来た当初を考えると有り得ない光景だっただろうとも思う。

「あの子は、ヘレスの統治委員会の委員【ロード・シリア】の娘なんだ」

レオンの言葉に、ランディーは一瞬はっとなった。ロード・シリア、その名前はランディも聞いたことがある。ヘレスでも超過激派として知られ、この戦争にも積極的に関与していると噂されている。あの優しいリサーナという子が、そのシリアの娘？ランディはにわかには信じられなかった。

「ロード・シリアはこの戦争に積極的だ。ヘレスでも和平案は幾つか出ているようだが、シリアによって却下されている。それだけ影響力も大きい。しかしリサーナは、そんなヘレスの国策に反対し、異端者の汚名をかぶり、自らの危険も省みずこんな辺境に逃げてきたんだ。」

そんなヘレス人だっているってことさ。そう言ってレオンは扉から出て行った。

確かに彼女やレオンを見ていると、自分が抱いていた魔族への印象とは随分と異なっていた。もっと凶暴で、自分が魔族を憎んでいるように、人間を憎んでいるのではないかと。

「でも、だからと言って！」

友が魔族に殺された事は間違いなく現実だ。そして戦争の仲間もたくさん魔族に殺された。簡単に魔族と仲良くしましょうなんて、今更そんなこと、

「出来るわけじゃないか・・・。」

戦争はもう止められるような状態ではないんだ。ランディは、誰に言うでもなく一人部屋でつぶやいていた。

「少しよろしいですか？」

突然牢に現れたリサーナに少し驚きながらも、ランディは彼女との面会に応じた。

先ほどレオンから聞いたのだが、ランディの処分が今日決定するらしい。一体どんな結論がでるのかは想像さえ出来なかったが・・・。

「体調のほうはいかがですか？」

「君のおかげですっかり良くなったよ。ありがとう。」

いまだ魔族に対する敵対心はあるものの、この少女の献身的な看護や気遣いを目の当たりにするにつれ、ランディは以前ほど敵対心を剥き出しにすることはなかった。

リサーナは、ランディを見つめながら複雑な表情を見せた。彼と初めて出会った時は、今にも飛び掛ってきそうな形相だったのだ。しかし今は、こうして何の違和感もなく打ち解けることができている。

だからこそ、これからランディに告げなければならない内容にリサーナは心を痛めていた。しかしこれは、自分が伝えなければならない内容だと思った。

「そうですか、それは良かったです」

にこっと笑いながらそう返答した後、リサーナは黙ってうつむいてしまった。

「どうしたんですか？」

ランディは、うつむいたままのこの少女の真意がわからず彼女の名前をよんだ。これまでずっと彼女を見てきたが、こんな苦しそうな表情は見たことが無い。

「ごめんなさい！」

溢れんばかりの涙を目から流しながらリサーナはランディに突然あやまってきたのである。

ランディは意味がわからず慌てふためくばかりだった。リサーナは顔を両手で押さえながら声を出し号泣している。

何故泣く必要があるのか、なぜ謝るのか。ランディは少女の行動に困惑していた。

「私たちは」

ようやく顔をあげたリサーナは続けていった。

「私たちは、あなたの記憶を消去しなければなりません！」

ランディは、しばらくの間この少女が何を言ったのかを理解できずにいた。

(記憶を消す？記憶を消すってどういうことだ？)

うまく状況が飲み込めていないランディにリサーナは話を続けた。

「つまり、あなたのこれまで生きてきた歩みを消し去ってしまうということです。」

リサーナはわざときつい言い方をした。

自分がランディを助けたことによって、逆に彼を追い詰める結果になってしまった。彼に憎まれ蔑まれてもしなければ、自分がおかしくなってしまうそうだった。

クルド人であれヘレス人であれ、失われそうな命を放ってはおけないと言いながら、それ以上の仕打ちを、これからこの青年に与えようというのだ。

私はなんという自己中心的な生き物なのだろう。自分たちの未来を守る為に、彼の過去と、恐らくは未来をも奪うというのだ。

たとえこの場で彼に殺されたとしても仕方ない。心の中で葛藤を繰り広げながらリサーナはランディを見た。

しかし、ランディが見せた反応はリサーナにとって意外なものだった。

「そうか、仕方ない・・・」

ランディもある程度は覚悟を決めていた。レオンとリサーナはともかく、他の住人たちは明らかに人間の自分に対して動揺を隠さなかった。本来なら、捕まったと同時に処刑されていてもおかしくはない状況だった。

もし、俺をこのまま釈放したとすれば・・・。クルド軍を率いて、この村へ攻め込まれるのではないか。そう恐れているのだ。

「そうか、記憶がなくなってしまうのか。。」

顔に手をあてながら天井を仰いだランディのその目からは、一粒の大きな涙がこぼれた。

「立派な満月だな」

レオンは自分の部屋から見える月を見ながら誰に言うでもなくつぶやいていた。そろそろリサーナがあの青年に明日のことを告げている頃だろう。リサーナの心境を考えるとレオンは心が痛む。

レオンとしては、あの青年をこのまま帰しても何も問題はないと判断している。しかし、村の年寄り達がかたくなに記憶を封じることを主張するばかりだ。

「気持ちはわからなくもないがね」

彼らとしては、なんとしてもこの村とリサーナだけは守らねばならないのだ。万が一のことまで考えて行動しなければならない。

しかし、あのランディとかいう青年。ここに来た時と今では、全く別人のようだ。

リサーナが毎日見舞いに行っていたが、恐らくは彼女からの影響を受けたのだろう。

「まあ、可愛い女の子が見舞いに来てくれれば俺だって元気もでるだろうけどな」

(例えそれが、クルドであろうとヘレスであろうとな)

レオンは心の中で何度もその言葉を思い浮かべた。そしてある決意をしたのだった。

出立の朝が来た。

今日はランディがクルド王国へ戻る日だ。

しかし、この隠れ里をクルド人であるランディに見られた今、この村の記憶を持ったままクルドへ戻ることは許されぬと長老たちは判断した。

もちろんランディは、この村のことを報告するつもりはない。崖から落ちて死ぬはずだった自分を救ってくれたリサーナやレオン達を裏切ることなどできはしない。

しかし、村の大半の者はいまだランディに警戒心を抱いているし、自分の中の魔族への警戒心、いや憎しみと言うべきだろうか？それが完全に消えたわけではない。

リサーナやレオンは別として、魔族に友を殺された事は忘れていない。クルドの街へこのまま戻ったら、再び戦争に参加する可能性だって小さくは無いのだ。

その時は、この村のものとも戦わなければならないこともあり得るのだ。

(今の俺にそんな事ができるのだろうか・・・)

親に厳しく言われながらも無邪気に窓の外から部屋を覗いていた子供たち。最後には彼らとも随分仲良くなったものだ。

それに自分子供たちと同じ年代の子供、つまりランディーのことだが、こんな若者が戦争に参加しているという事実。、魔族の親達は、警戒しながらも自分の子供とランディを重ね合わせていたようで、リサーナと共に顔を出しにくることもしばしばあった。

そんな彼らを殺さねばならないかもしれないのだ。

(いっそ、あの時死んでいれば良かったのか・・・)

ランディはそんなことを頭の中で考え続けていた。

「では、記憶消去を始める」

誰かの声でランディは我に返った。

「じゃ、いくか」

レオンはランディに声をかけた。

術者がレオンだという話は、昨日リサーナから聞いていた。レオンはヘレスでも、指折りの黒魔法使いなのだという。この村では、術を扱えるのがレオンしかいないのだ。

「じゃあ、始めるぞ？」

ランディはレオンの言葉にただうなずくしかなかった。ついに、自分のこれまでの記憶が消え去るのだ。

しかし不思議と涙はでなかった。

(昨日、出尽くしてしまったかな)

やや自嘲気味にランディは笑った。

レオンの指が自分の頭にあてられる。そして、その口から呪文の言葉が発せられた。

(今から俺の言うとおりにしろよ?)

呪文にしては変な言葉だった。大体、自分にわかる言葉で発せられるものなのか？

(おい、聞いているのか?)

若干いらだち気味にレオンの言葉が聞こえた。

(今から俺は呪文を唱える振りをする、合図をしたら前はゆっくりと倒れこむんだ)

一体、どういうことなんだ？呪文を唱える振り？どういうことだ？

(そして、ぼーっとした顔してろ！いいな?)

ランディはわけもわからずレオンの言葉に従った。

(いまだ！)

合図の言葉どおり、ランディはゆっくりと倒れこんだ。

「長老、彼の記憶は完全に消去された。」

長老たちは恐る恐るランディを覗きに来た。言われたとおりの視線は宙を彷徨い、何も理解して

いない廃人のように振舞った。

「うむ、これなら大丈夫であろう。レオン、お前が責任を持ってクルドまで送り届けて来い」

「了解です、準備はできていますのですぐにでも」

レオンはそう言って、場車庫までランディを担いでいった。そしてランディを馬車に、ポンツ、と投げ込んだ。

「いてっ」

ランディはたまらず声を上げた。

「おい、まだぼけっとしてろよ！ばれちゃうだろ？」

一瞬ムッとなったが、言われたとおりうつろな目をして馬車に倒れこんだ。

(一体どうなってるんだ！？)

リサーナは部屋の中に居た。

とてもじゃないが、ランディの記憶が消去される場面に居合わせる勇気はない。いや、それを勇気と呼べるかどうかはわからないが。

とにかく、戦い以外でわかりあえた、とまではいかないが、時間をかければ分かり合うことができたはずなのだ。

(あの時私が助けられないほうが、結果はまだ良かったのかもしれない・・・)

リサーナが昨日から一睡もせずに考えていたことだ。

(記憶が消去されると、崖から落ちて死んでしまう・・・)

どちらも最悪のパターンにしか思えなかった。

もっと自分に力と勇気があれば、彼を助けることができたかもしれない。

自分は、この村に留まって何をしているんだろう？もっと他に、私にはやるべき事があるのではないだろうか？リサーナがそんな事を考えているとレオンが部屋に入ってきた。

「リサーナ、君も一緒に来るんだ」

「いえ、私は・・・」

事実から逃げていると思われてもいい、記憶が消去されたランディを見るのはリサーナにとって、正直辛かった。

「いいから一緒に来るんだ。彼を助けたのは君なんだ、最後まで見届けてやれ」

後悔はしたくないだろう？

レオンからそう言われ、リサーナは仕方なく立ち上がった。

場車庫には誰も居なかった。恐らく誰も近づかないようにとの命令が出ているのだろう。しかし、長老と数人の見張り役は居たらしく、リサーナが近づくのを見ると血相を変えて飛び出してきた。

「リサーナ様！部屋へお戻り下さい！後はレオンに全て任せるのです！」

出来ればリサーナもそうしたかった。しかし、彼をこの村へ連れてきたのは自分なのだ。全てを見届ける義務がある。そういうレオンの言葉が、リサーナの胸に突き刺さっていた。

「彼をこの村へ連れてきた責任は彼女にあります。この件で彼女が責任をとらずに、我々を導く資格がおありと思われませんか？」

「しかし・・・」

それでも納得しかねる長老にリサーナは言った。

「私は、この件に関して全責任があります。お願いします、どうか私をレオンと共に国境まで行かせてください！」

確かにレオンの言う通りだ。私は自分の行動に全て責任を持たなければならない。

「お願いします。」

リサーナの決意が固く、一度言い出したら聞かない性格なのは長老もわかっていた。

「わかりました。ですが国境付近についたら、後のことはレオンに任せるのです。」

いいですか？そう念を押して、長老はしぶしぶ許可をだした。

「じゃあ、行くか」

リサーナを隣に寄せ、レオンは馬車を静かに発車させた。

リサーナは、村が遠くに見えなくなるまで振り返ることが出来なかった。後ろには記憶を奪われたランディがいるのだ。そしてずっと昨日から考えていた事柄に没頭しはじめた。

(私は戦争が嫌で、ヘレスの首都から逃げてきた。首都に居れば戦況や被害報告などが頻繁に提供され、嫌でも戦争を実感しなければいけなかった。だから、こんな辺境の森の中に隠れ村を作り、一切戦争とは関わらない生活を選んだ。)

でも・・・

でも、それはただ単に逃げているだけじゃないのか？戦争が終わったら、何事もなかったかのように首都へ戻り、そして、何事もなかったかのような日常生活を送る。。。

今、こうしている間にもヘレスもクルドも殺し合いをしているというのに。

(私には、やらなければならない事があるはず。いえ、私にだからこそ出来ることがある！)

「そろそろいいかな。」

レオンの一言でリサーナは自分の思考の世界から呼び戻された。

「何がそろそろいいのですか？」

自分の考えの中に没頭していたこともあって、レオンの話をほとんど聞いていなかった。

「おい、ランディ！もう寝た振りはしなくていいぞ」

リサーナはレオンが何を言っているのか一瞬理解ができなかった。

「ど、どうも」

荷台から起きてきたランディは、誰が聞いても間抜けすぎる挨拶をリサーナに交わし、リサーナは状況がわからず、目を丸くしてランディを凝視しているしかなかった。

「これは一体・・・・・・・・」

リサーナは目の前にいるこの青年が、記憶を消去されたばかりの人間にはとても見えず、多少狼狽していた。

この青年は、レオンの魔法で記憶を失っているはず。

「はっ、まさかレオン！あなた・・・」

「実はさ、呪文を唱える振りをしただけなんだ」

そして呪文が成功した振りをさせた事や、前日からそのつもりで居たことなどを話した。話を聞いたリサーナは安堵のため息をついた。それと同時に、なぜ自分に何も言ってくれなかったのか、当然とも言える不満をレオンにぶつけた。

「だってお前嘘がへただろ？これは絶対に失敗するわけにはいかなかったんでね。悪いが内緒にさせてもらった」

そう言ってレオンはニヤッと笑う。

「もう！意地悪なんですから。」

そう言いつつもリサーナはレオンの計らいが心底嬉しかったようだ。その表情は晴れやかなものだった。

「しかし・・・」

リサーナは当たり前とも言える疑問をレオンにぶつけた。

「しかし何故彼を助けたのですか？」

それはリサーナだけでなく、ランディ自身も気になっていた。長老たちの言うとおりに、自分は今や彼らにとってやっかいな情報を持つ人間だ。このままクルドに返す事はレオンやリサーナにとっても危険な賭けと言える。

「今回の事はチャンスだと思うんだ。」

レオンはそう切り出した。

「クルドとヘレスの戦争が始まってもうかなりの期間になる。我々は戦争を嫌ってこの辺境へと逃げ延びてきた。しかし、それだけで良いと思うか？」

リサーナだってそれはわかっていた。統治委員の娘が反戦活動に参加して、その一環として辺境の地への移住活動。確かにある程度の効果はあった。しかし、根本的な解決策にはなっていないのも事実だ。

ヘレスの首都を初め、一部の地域や都市で反戦活動が活発になった。しかし現状はそれほど甘くなかった。彼女の父は、これまでにクルドに殺されたヘレスの人々の心情を上手に利用し、ク

ルドへの戦意を煽っているのだ。

クルドに勝利しなければ、これまでに亡くなったヘレス兵士の死は全て無駄死にだと。しかし、そんな現状をいくらリサーナが憂いていても何も解決はしなかった。

「しかし私に出来ることなど、たかがしれています・・・。」

これまでだって出来ることはやってきたつもりだ。しかし現状は何も変わっていない。

「君一人で全てを行う必要はない」

リサーナの迷いを断ち切るようにレオンは話してきた。

「君には仲間がいるじゃないか。俺だってそうだし村の皆もそうだ。そして首都クリスタルロードや各都市村にはもっとたくさんの賛同者がいるはずだ。彼らの協力を得られれば出来ないことはないだろう？」

たしかに戦争に反対している人は数多くいる。しかし、かれらも個々では立ち上がりにくいのだ。

「統治委員の娘である君が立ち上がれば、きっと彼らも協力してくれる。そして・・・」

それからレオンはこう続けた。

「ランディ、君もリサーナに協力するんだ。」

「え・・・？」

いきなり自分の名前が呼ばれ正直戸惑った。

「俺がヘレスでの反戦活動に協力・・・」

ヘレスは魔族の国家だ。人間の自分が異種族の国家で何が出来るのだろうか？

「君はこの十数日、ヘレスの住民との交流をずっと持ってきた。俺たちに関してある程度の理解はあるだろう。それに、以前ほどの反ヘレス主義者ではないはずだ。少なくともリサーナは嫌いじゃないだろう？」

確かに、レオンやリサーナとの交流を経て、ランディはヘレス人達への憎しみのようなものは消えていた。親しい友を殺されたのは事実だが、全てのヘレス人がそれを望んでいるわけではなかった。

「しかし、僕に何かが出来るんだろうか・・・」

「君だから出来ることがあるんだ。最初はヘレスを憎んでいた君だ。でも、今、全てのヘレス人が戦争を望んでいるわけではないのはわかっただろう？そして、君が大事に思ってくれているであろうリサーナを傷つけない気持ち、それをヘレスやクルドの人間達に伝えればいいんだ。お互いに憎しみ合う理由なんか、どうにでもなる事を君が一番わかっているはずだ。」

俺たちがどうこういうよりよほど効果がある。レオンはそうも言った。

「ランディ、私に協力して下さいますか？」

何かを決意した表情でリサーナはランディに話しかけた。

「リサーナ、では立ち上がってくれるのか！？」

「はい、ここでじっと身を隠しているだけでは何も解決しません。統治委員の娘である私だから出来る事、それが必ずあるはずですよ。いまのレオンの話を聞いて、そう思ったの」

ちょっと照れくさそうにリサーナは話した。

「統治委員の娘という肩書きで協力してくれる人もいるかもしれませんが。これまではこんな肩書き嫌いでしたが、これが戦争終結の為に役立つのならいくらでも使ってみせます。」

リサーナの目にはもう迷いはなかった。ランディは自分はどうか？たぶんこのまま国に帰ると言っても、素直に返してはくれるだろう。しかし……。

「俺も！」

ランディはある決意を固めて叫んだ

「俺も一緒に戦います！本当なら一度死んだ身なんだ。だったら、戦争終結の為に俺に出来ることがあるならなんだってやる！」

嘘ではなかった。一度は死んだも同然だった。しかし、この心優しいエルフィードの少女に救われ、彼らへの憎しみ、少なくとも、この二人への憎しみなんか全く無い。この二人のの優しさに応えるためにも、ランディは命を懸けて協力するつもりだ。

「そうか！協力してくれるか！」

レオンは心底嬉しそうだ。リサーナも目にうっすらと涙をためている。

「よし！じゃあ村へ戻ろう！長老たちを説得しなきゃいけないからな。これが一番難題かもしれないけどな。」

そう言ってレオンは豪快に笑った。

「でも、納得してくれるでしょうか……。」

ランディーは湧き上がって当然の不安を口にした。

「そのときは、3人で始めればいんですよ」

リサーナはにこっと笑ってそう口にする。

彼女にはもう、迷いは無いようだった。

そうだ、事実、こうして人間の俺を受け入れてくれる二人が居る。ヘレス中を探せば、その数はもっと増えるだろう。そしてそれは、クルドにも言えるのだ。

一度は生を失う事を覚悟したこの身だ、この心優しい少女と共に戦争終結の為に死に物狂いで戦おう！ランディーは、心の中で、そう固く誓った。

そして彼は後日、ヘレスとクルドの戦争において重大な役割を演じる存在となる。

それは夕凧の大陸を舞台とした、別の物語で語られる事となる。

とある青年兵士と魔族の少女の物語

<http://p.booklog.jp/book/74650>

著者 : HIRO

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/reimeihiro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74650>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74650>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ